● 中　部

伊　藤　美由紀

中部地方のクラシック音楽界もコロナの影響から少しずつ回復に向かい始め，コロナ禍に入り延期された公演の再開，海外からの奏者の来日が始まった。

大イベントでは３年ごとに開催の「あいちトリエンナーレ」から名称変更の「STILL ALIVE国際芸術祭あいち2022」が７-10月に開催された。現代アートに焦点を当てた芸術祭であるが今年は舞台芸術プログラムも充実していた。音楽公演では，ライヒの来日はなかったものの本人の監修を基に構成され，エレクトロニクスも含み現代音楽で活躍中の国内の演奏家によるライヒの初期の主要な作品を含んだ『スティーヴ・ライヒ～スペシャル・コンサート』（7/30，31），塩見允枝子パフォーマンス作品『～音と詞と行為の時空～』（8/6），足立智美による独創的な即興演奏を含んだ『音響詩ソロ・パフォーマンス』(8/7)，ジョン・ケージの晩年の演劇的作品で歌手，ピアノ，蓄音機，音響，照明の要素がタイムテーブルなどに基づき，足立智美により能楽師２名を歌手パートの一部に起用し視覚的にも凝った演出による『ユーロペラ３＆４』（8/13，14），能面の写真による映像と今井千景の５作品による『シネクドキズム３』（9/30，10/1）の５点。質の高い演奏と洗練された構成による音楽企画で注目された。地元文化芸術団体７組が選考された舞台芸術公募プログラムでは，名古屋音楽大学主催，田中祐子（指揮）の『グローリア』（9/24），第８回名古屋市民バンドフェスティバル（9/25），クセナキス作品，地元在住の作曲家３名：伊藤美由紀，板倉ひろみ，水野みか子の新作を含んだプログラムで澤田幸江（ヴァイオリン），佐藤洋嗣（コントラバス）によるニンフェアール第17回公演『クセナキス生誕100年記念：究極の弦』（9/26）の音楽３公演で盛り上がった。

愛知県芸術劇場主催公演では，名曲プログラムによる徳岡めぐみ『オルガン・アワー』（6/24），廣江理枝『オルガン・メモリアルコンサート：ラヴェル「展覧会の絵」初演100周年記念』（10/19）などのパイプオルガン企画，ストラヴィンスキー《結婚》による『お菊の結婚』と原田敬子の舞踏と打楽器アンサンブルの為の『鬼』の２新作によるNoizmと鼓動の共演による『鬼』（7/23），ヨナタン・ローゼマン（チェロ）の共演で愛知県芸術劇場芸術監督の勅使河原三郎によるプロデュース，出演によるライブミュージック＆ダンス『天上の庭』（9/16，17）など興味深い現代作品が印象深かった。

名古屋フィルハーモニー交響楽団の定期は，『小泉和裕のチャイコフスキー』（１月），スペシャリティ・シリーズ最後の３月は名古屋出身の佐藤晴真を迎えてハイドン《チェロ協奏曲第２番》とショスタコーヴィチのスペシャリスト井上道義による８番で盛大に閉じた。新シリーズ「シンフォニスト」初回の定演500回目にあたる４月は，音楽監督７シーズンに入る小泉和裕よるモーツァルトの《ジュピター》から始まり，小泉により名フィルで初演された記念すべき超大作，R.シュトラウスの《アルプス交響曲》の記念碑的な２作品で観客を魅了した。５月は海外から久しぶりに迎えた英国若手指揮者アンガス・ウェブスターにより自国の最重要シンフォニストとして生誕150年を迎えるヴォーン・ウィリアムズがテーマ。６月はアントニ・ヴィットによるブルックナー《交響曲６番》とコロナで延期されていたバルトーク《２台のピアノと打楽器のための協奏曲》を名フィル首席打楽器奏者の窪田健志とジョエル・ビードリッツキー，ピアノの小菅優と居福健太郎によるスリリングな演奏で実現。小泉の『オネゲル＆ブラームス』（７月）。９月は原田慶太楼によりコロナで延期されていたアダムズの《主席は踊る》とアタッカ・カルテットとの共演で《アブソリュート・ジェスト》そしてドヴォルザークの８番を，全身を駆使したダイナミックな指揮により熱演。ロシアの巨匠ヴァシリー・シナイスキーによるロシア音楽プログラム（10月）。小泉によりコロナで延期になっていたマーラー《復活》(11月)。久しぶりのマスク無しの合唱で色んな意味で復活を感じた。12月はサクソフォンの上野耕平を迎えてリュエフの《サクソフォン小協奏曲》と坂田直樹による名フィル委嘱作品《盗まれた地平》を含んだ次期名フィル音楽監督に就任する川瀬賢太郎によるシベリウス篇。市民会館名曲シリーズは「欧州音楽紀行」をテーマに５カ国の名曲によるプログラム，特別公演ではスウェーデン人指揮者オーラ・ルードナーによる「第九演奏会」など盛り沢山であった。

セントラル愛知交響楽団の定期では，シーズン最後の３月は常任指揮者の角田鋼亮によりエルガー《エニグマ》を含む変奏曲をテーマとしたプログラム構成。新シーズンのテーマは『歌』。５月はブルックナー５番で角田により幕開け，６月は指揮にマーク・マスト，中村太地を迎えてブラームスのヴァイオリン協奏曲。９月の角田による「言葉のない歌，言葉のない踊り」をテーマとしたプログラムでは，阪田知樹を迎えたモシュコフスキ《ピアノ協奏曲》を含めて歌心の溢れる公演に纏め上げた。11月は荒井結（チェロ）を迎えてチェイコフスキー《ロココ風の主題による変奏曲》に加え，小松長生によるシューマン２番，メンデルスゾーン５番で祈りを感じるダイナミックな公演。

中部フィルハーモニー交響楽団の定期は，昨年から継続の秋山和慶の「ベートーヴェン・ツィクルス４，５，６」（５，９，12月），佐藤晴真によるシューマン《チェロ協奏曲》を含んだ飯森範親の「ドイツ・ロマンティシズムへのオマージュ」（７月），中部フィル委嘱作品，小櫻秀樹の趣向を凝らした演出もある《俺は指揮者だ！》を含んだ田中祐子の「プログラムに個性を込めて！」（10月）。

創立20周年となる愛知室内オーケストラでは，２種のシリーズによる定期公演（各11回）を開始。A定期は４月の山下一史音楽監督就任披露公演から始まり，古典作品を中心としたプログラム構成。B定期は指揮に山下，ソリストに客演首席奏者の山本直人を迎えて《オーボエ協奏曲》を含んだオール・R.シュトラウスプログラムPart１（４月），福川伸陽を迎えて《ホルン協奏曲１番・２番》を含んだPart２（11月）など国内外の奏者を迎えての多彩な企画。ホルンの類稀なテクニック，音楽性による福川の演奏を２曲続けて聴けた贅沢な瞬間を体験した。

その他，マリンビストの小森邦彦によるヴィニャオの打楽器作品に焦点を当てた公演『ヴィニャオ，現る。』（7/14），ティンパニに焦点を当てた窪田健志の意欲的なプログラムによる『打楽器リサイタルvol.５』（11/7），名フィル在団20周年記念・田中宏史『トロンボーンリサイタル』（11/17），名フィルコンマスの荒井英治，松本望（ピアノ）デュオ・リサイタル（11/27），窪田健志，中山航介によるDistance Percussion DUO!!（12/11）を含む個性的で良質な室内楽公演も注目された。